

二つの可謬主義

―リードとポパー―

スコットランド常識学派の代表的な哲学者であるトマス・リードは、しばしば彼の哲学を、いわゆる観念説と対比する。リードによれば、観念説は、古代のペリパトス学派に起源をもち、デカルトやロックによって広められ、やがてバークリやヒュームによつてもたらされる懷疑論的な帰結を導くことになった。リードの議論は、常識の原理に訴えることによつて、懷疑主義を回避しようとするものであるが、彼の議論は、長らく哲学の表舞台に立つことはなかった。しかし、自然主義哲学やプラグマティズムが脚光をあびる中で、彼の議論は、今再び注目を受けつつある⁽¹⁾。私自身すでに指摘したことだが、リードの議論と、現代のプラグマティズムの関連は、現代におけるリード研究の一つのテーマともなっている。リードの認識論の特徴は、知識の概念に、絶対的な確実性を要求しない、可謬主義的なものであり、それがリードの哲学を、先ほど述べたような現代哲学に近いものにしてしていると考

えられる。本論文では、リードの可謬主義を、彼の常識に関する議論をもとに示しつつ、それをまた別の可謬主義的な知識と対比させたい。

一、リード哲学における常識

リードの認識論において、重要な役割を果たしているのがいわゆる常識である。まずリードにおける常識がどのようなものであるのかということについて確認しておくことにしよう。リードは、常識について次のように述べている。

すべての知識とすべての学問は、自明な原理の上に建てられなければならない。そしてそのような原理について、常識あるすべての人々は、それらについて判明に考へるとき有能な判定者なのである⁽²⁾。

戸 田 剛 文

そして常識を示す言葉である common sense の sense つまり感覚について、それが一種の判断であることをリードは強調する。そして常識は理性の一部であり、自明なものを判断する能力なのである。この理性の一部である常識の働きが、上で述べたような第一原理を判別するときに用いられるのである。

知識は、その前提として自明な原理の上に建てられなければならないという考え方は、デカルトにも共通するものである。周知のとおり、デカルトは絶対確実な基礎の上に知識の体系を立てることが必要であると考え、それを発見するため方法的懐疑を行ったのだった。この点を考えるならば、リードの知識の体系は、ある種の基礎づけ主義のように見える。しかし、彼の基礎づけ主義とはどのようなものだろうか。デカルトと比べることによって、このことを見てみることにしよう。デカルトとリードの基礎づけ主義の最大の違いは、基礎となる第一原理の違いとしては、その数が異なるということである。デカルトにとつて、知識の体系の基礎となるのは、コギトの存在である。そして彼の知識の体系は、そのみを出発点として再構築されている。しかし、リードにとつて、第一原理は一つだけではない。リードは、第一原理について、哲学者のあいだで大きな意見の違いがあることを認めている。リードはペリパトス学派とデカルトを対比して、ペリパトス学派は第一原理が過剰にあり、デカルトはその反対の極端としてたった一つのものを第一原理にしたとして批判するのである。つまり、リードは、自分自身が第一原理として挙げる

いくつかの原理こそが、数としても適切だと考えているのである。

しかし、リードとデカルトの第一原理の違いは数だけではない。質にもまた違いがあるように思える。デカルトにとつて、知識とは、絶対的で確実なものでなければならぬ。信頼性がいくら高くとも、間違いの可能性がある場合は、それは知識とは認められない。しかし、リードにとつて、確実性は、いわゆる蓋然性と根本的に異なるものではない。例えば次のように述べている。

論証的な明証には程度がない。しかし、哲学的な意味で理解されている蓋然的な明証には、最小限のものから、われわれが確実性と呼ぶ最大限のものまで、あらゆる程度がある(3)。

また、ヒュームの議論に言及する箇所でも、次のようにも述べている。

哲学者は、蓋然性を、論証に反対するものとして理解し、一般人は確実性に反対するものとして理解している。しかし、この著者は、それを不可謬性に反対するものとして理解しているが、どのような人もそれを主張したりはしない(4)。

これらのリードの主張は、確実性が蓋然性の最も高いもので

あり、確実であるものとそうでないものは、いわば程度の差であることを述べたものとして理解できる。そして第一原理から生み出される知識には、さまざまな程度の明証性を持つものがあるのである。

絶対的な確実性の結論を生み出す第一原理があるように、蓋然的な結論を生み出すにすぎない他の第一原理がある。そして、最も低い程度の蓋然性も、絶対的な確実性と同じく、第一原理に基づかなければならない⑤。

では第一原理自体についてはどのように考えられるのだろうか。これらは、他の知識とは異なり、絶対確実なものとして考えられているのだろうか。おそらくそうではない。まずリードは、第一原理が必然的なものと偶然的なものに分ける。偶然的な第一原理の正しさは、必然的なものと異なり、あくまでも神によって与えられたわれわれの成り立ちに基づいており、そこに論理的な必然性はない。それゆえ何が第一原理かを論じることには、われわれは用心しなければならないとリードは述べる。

だが、たんに通俗的な先入観でしかないものが、誤って第一原理と考えられてしまうことはありえないことではない。また、本当に第一原理であるものが、言葉の魔術によって、それについて人の目をくらまし、その結果その明証性を覆い隠し、率直な人にそれを否定させるよう

になることもありえないことではない⑥。

このように、リードは、第一原理がそうでないものと取り違えられる可能性を認めている。もしもリードがこの問題を自らにも当てはめるならば、彼が提示する第一原理が絶対確実であるとは考えないかもしれない。しかし、一方で、リードは彼があげる第一原理が、もしかしら第一原理ではない可能性を認めるかもしれないが、同時に、何らかの仕方では正しい第一原理が明らかになると考えている可能性は十分にある。というのも、リードはしばしば、第一原理が論証などを受け付けないものではあるが、自然が第一原理をそうではないものと見分ける能力をわれわれに与えていることを強調するからである。もしそうであるならば、リードは、やはり正しい第一原理があり、それはわれわれにとつて明らかになると考えていると言える。この場合、そのような第一原理は、固定的で確定的なものとして考えられていると言えるだろう。次に、私は、リードのあげる第一原理をより具体的に取り上げることにしたい。そしてその上で、リードの可謬主義の特徴を明らかにしよう。

二 リードの第一原理

リードは、知識の出発点としての第一原理を偶然的なものと必然的なものに分ける。必然的な第一原理は、まさしく「反対であることが不可能な」原理であり、いわば論理的に真となる第一原理である。一方、偶然的な第一原理は、その原理

自体が論理的に必然なのではなく、いわば神によってわれわれの本性に組み込まれている原理である。そして、偶然的な第一原理の方が多くの人々にとってより重要だとされる。これから見ていくように、偶然的な第一原理は、まさしくわれわれの生活実践に深くかわるものだからであろう。

ではこれから偶然的な第一原理についてみてみることにしよう。偶然的な第一原理はつぎのようなものからなっている。

- (1) 意識の対象が実在していること
- (2) 私の思考は、私という人格・存在者に属している。
- (3) 判明に記憶されていることは実際に生じたということ。
- (4) 記憶が及ぶ限り、人格には同一性があるということ。
- (5) 判明に知覚されるものは実在するということ。
- (6) われわれが行為と意志を決定する能力を持っているということ。
- (7) われわれが真理を誤りから区別する能力は当てにならないものではないということ。
- (8) 周囲の人々には生命と知性があること。
- (9) 表情や身体的行動は、心の思考や傾向性を示しているということ。
- (10) 事実の問題において、人間の証言や権威にも敬意が支払われるべきだということ。
- (11) 多くの出来事が人間の意志に依存しているということ。
- (12) 自然の出来事は、同じような環境の下では同じような出来事が生じること。

これらが第一原理として言われる以上、これらはわれわれが実践的にも（そして理論的にも）前提とせざるをえないものとして提示されている。リードは、彼以外の多くの哲学者によっても前提されているのは（1）だけであると言う。確かに、（1）以外のものは、知覚対象の実在性、記憶の信頼性、他者の存在、自然現象の法則化などにかかわるものであり、これらは歴史的に哲学者がその受容をめぐって議論してきたものであると言えるだろう。リードの知識概念がどのようなものかを知るために、ここではこの中で特に、（5）と（7）について考えてみることにしよう。

リードは、（5）で「判明に知覚されたものは実在する」ということを第一原理として挙げている。この言葉をどのようにわれわれは捉えるべきだろうか。私が問題にしたいのはこの第一原理の強制力とでもいえるものである。一つにはこの原理自体が、絶対的に正しいものだと思えることができる。しかし、われわれは、たとえ判明に知覚していると思っているものでも、その対象が実在しないことがあることを知っている。もちろん、リードもそのことを知らないわけではない。それにもかかわらず、この原理を絶対的に正しいものとして考えることは可能である。このときポイントになるのは、先ほどの言葉でいえば、「われわれは、たとえ判明に知覚していると思っているものでも」の「思っている」という点である。つまり、知覚が成り立つのは対象が実在しているときだけであり、もし誰かが判明に対象を知覚していると思っていたとしても、もしも対象が実在していないことが後でわかる

ならば、それは知覚ではなかったということである。

しかし、この解釈には問題がある。まず、リードがわざわざ「判明な知覚」と言っている点がこの解釈ではくみ取ることができない。例えば、ある人が対象を判明に知覚していると思ったが、その対象が実在していないことが後でわかったとする。この場合、ある人が知覚していると思ったが、実は知覚ではなかったということは意味があるだろうが、判明な知覚ではなかったということは意味をなさないように思われる。というのも、判明かどうかは、知覚が行われるその際に最もはっきりとわかるものだからである。

そこでこの第一原理は、必ずしも絶対的に正しいとは限らないと考える方がよいように思われる。つまり、極めて信頼度の高いものであり、われわれは基本的にはこれを信用するべきものとして提示されていると考えるのである。この考え方は、リードの可謬主義とも良く合うだろう。

また、リードがここで述べている知覚の対象についても確認しておきたい。周知のことであるが、知覚の対象は、リードによれば観念説者がいうような、心の中の表象物―観念―ではない。もしこれが心の中の観念であるならば、(5)は(1)に含まれることになる。リードにとって、知覚の対象は、あくまでも心の外にわれわれから独立して存在している外的物体なのである。リードはつまり、直接知覚の理論を、観念説に對抗して提示しているのである。

リードは、心の中の観念が直接の知覚対象であるとする考えこそが、懷疑主義に至ったと考えている。これは、ロック

などの立場に対して、パークリが抱いた疑念と同じものである。パークリは、懷疑主義を克服するために、心の外の知覚されない物質の存在を否定し、心の中の観念こそが実在物であると考えた。これに対してリードは、心の外の存在物を直接の知覚対象とすることによって懷疑主義を克服しようとしたのである。

つまり、リードにとって心の外に存在する物体の実在性を確保することは、それが直接知覚されること(直接知覚の理論)、そして判明に(かつ直接に)知覚された物体が実在すること(第一原理)によってなされていると考えることができる。たんに物体が直接知覚されるのだというだけでは、なぜそもそもそのような外的な物体があると言えるのかということが問われるかもしれない。しかし、直接知覚されたものが実在するということを、むしろ第一原理として設定すること、リードは、外的物体の実在を、それ自体証明できないもの―あるいは証明の必要のないもの―として認めることができるのである。

ここで私が特に注目したいのは、リードは、外界の物体の実在性を第一原理とするにあたって、知覚とからめてそれを定式化していることである。このことは、ムーアが「常識の擁護」で述べていることと比較すると興味深い。ムーアは「常識の擁護」の中で、自らの立場を示すものとして、自明であるので述べる価値があるかどうかかわからないと断りながらも、確実に真であると彼がみな一群の命題をあげる(2)。それらの確実に正しいとされる命題のリストの中には、私という身

体が存在すること、それらが接触していたりしなかったりする物体が存在すること、それらについての経験が私がつつと、他者の身体が存在すること、物体や他者についての事実を私が観察できること、想像上で（あるいは夢の中で）それらについての思考をもつことができること、私や他者、そしてさまざまな物体が時間を通して持続することなどが含まれている（今私があげたリストはムーアがあげている順番通りでは必ずしもない）。これらのリストを見ると、確かに、ムーアは、外的な物体が経験の対象であることを明らかに正しいものであるとしているが、この経験を待つということが、外的な物体の存在と一括りにされているわけではない。あくまでも外的な物体が存在しているということは、それ自体単独で正しいものとして認められているのである。

ムーアは、これらの命題が第一原理だと述べているわけではない。しかし、リードの第一原理と近い特徴を持っている。ムーアは、彼が確実に知っていると考えている命題について、なぜそれを彼が信じているだけではなく、知っていると言えるのかという批判を想定し、それに対して「確実に私はそれらを知っているように私には思えるということ以上にうまく言えるべきものはないと思う」と答える。つまり、これらの命題に対する直接的な正当化は基本的には不可能なのである。ムーア自身が、こういった命題を第一原理として捉えていると考えなければならぬわけではない。とりあえず、仮にムーアのこのような主張を、第一原理としてのべるならば、その中の一つは、われわれの身体を含めてさまざまな物体が実在

するということになるだろう。（ムーア自身は、このような表現の明快さにいささか懐疑的であるが⁽⁸⁾。）

リードは、なぜこのように外的な物体が実在するというところだけを第一原理としなかったのだろうか。すでに述べたように、明らかに「判明に知覚された対象が実在する」ということは、たとえ頻繁にはないにせよ、経験によって否定される可能性があるものである。もちろん一つの可能性は、すでに述べたように、物体の直接知覚が外的物体の実在を保証するとリードが考えていたということである。知覚と物体の存在の関係をリードは強調しようとしたのかもしれない。

しかし、別の可能性もある。それは、第一原理とは、われわれが世界についての知識を獲得していく発達のプロセスの出発点として述べたものであると考えることもできるかもしれない。われわれの外界の認識のプロセスとして考えるならば、外的な物体が存在する（もちろんこのように言語化されている必要はないだろうが）、という点がまず前提とされるのではなく、われわれが知覚しているものが実在しているという判断がまずあつて、そこから外的物体が実在しているという一般化がなされると考えることができる。しかし、この考え方には問題があるように思われる。リードが偶然的な第一原理として挙げているものは、必ずしも、外界認識の初期条件として同じ地位にあるもののようには思えない。（2）や（11）などは、比較的抽象度が高く、本能的にもともとわれわれがもっている考え方と言えるか疑問であらう。

私が考えるもう一つの可能性は、先ほど述べた可能性と無

関係ではないが、それよりももう少し適用が広い。つまり、外界の認識の発達という観点からとらえた場合、この第一原理は、子供に限定されてしまいうだろうが、そうではなく、実践的な行動原理としてこの原理をとらえるのである。この捉え方は、この第一原理の捉え方としては一番もっともらしいものだと思う。リードは、しばしば、第一原理は、学識のある人と一般人との間に共有されているものであり、それを疑うことは、哲学者以外の人には思いもよらないものだと述べる。これらのことはリードの第一原理が理論的なものに限定されるのではなく、むしろ実践的なものであることを示しているとも言えるだろう⁽⁹⁾。つまり、基本的にわれわれは判明に知覚しているものが実在しているものとして判断して行動するべきだということである。

確かに、われわれが通常の状態では、判明に知覚しているものは実在しているものと判断して行為するといことは認められてもいいかもしれないし、そのように判断した方が合理的な場合の方が多いということも認められてよいかもしれない。しかし、これもまた実際に「そうであるべき」かどうかは、ある程度状況に依存する。たとえ対象が判明に知覚されている場合でも、その対象が実在しているかどうかを疑ってかかった方がよいような場合もあるだろう。例えば砂漠で遠くにオアシスが見えている旅人にとっては、それがたとえ彼にはつきりと見えていたとしても、もしも蜃気楼という現象があることをその人が知っていたら、そこに走っていくことは体力を無駄に消費することにならないように、その

実在に懷疑になるべきだというべきかもしれない。

もしもこのような点が認められるとするならば、(5)は「多くの場合において、われわれは判明に知覚している対象が実在していると信じるべきである（あるいは信じて行動するべきである）」と言いかえることができるだろう。しかし、これが第一原理となるのは少し奇妙に思われる。というのも、この原理は今自分のいる状況がこの多くの場合に含まれるのかどうかを何も教えてくれるわけではない。われわれはこの原理を用いる前に、まず自分のいる状況が「多くの場合」に該当するののかどうかを判断しなければならぬ。そして多くの場合に該当することを確認してからこの原理を適用することになる。このような原理が第一原理と言えるかどうかは疑わしいように思われる。

しかし、逆に言えば、リードがこのような信念を第一原理として受け入れているという点から、リードの哲学的な一つの立場が明らかになると思う。そのことを述べる前に、もう一つの第一原理、つまり、(7)「われわれが真理を誤りから区別する能力は当てにならないものではないということ」を見ておくことにしよう。

このリードの第一原理も、デカルト批判としての役割を果たしている。まず第一にこの原理は、デカルトの方法的懐疑の中の全面的懐疑——欺く神の議論——に対して向けられたものととらえることができる⁽¹⁰⁾。つまり、われわれは何らかの仕方で自分の能力によって物事の真偽を見極めなければならず、それを最大限に用いたとしてもその能力自体が信

頼できないものとしてわれわれに与えられていると想定することはできないということである。例えばこの点についてリードは次のように言う。

もしも懷疑主義者が、彼の懷疑主義を、次の基礎の上で、つまり、すべてのわれわれの推論能力と判断能力が、その本性において誤りうるものであるという基礎の上に建て、あるいは、それらが誤りえないものであることが証明されるまで、少なくとも同意を差し控えることを決心するべきであるならば、この強い足場から、論証によって彼を打ち負かすことは不可能であり、彼は、その懷疑主義を楽しませるままにしておかなければならない⁽¹⁾。

つまり、リードは、もしもわれわれの能力が誤るものではないことを示さなければ物事に同意できないならば、われわれは何にも同意できないというのである。なぜなら、われわれが自分の能力について調べるためにも、やはりわれわれの能力を行使しなければならぬからである。

今のような点が強調された場合、確かにリードの第一原理は説得力があるように私には思われる。これはある意味で、論理的な議論である。われわれの能力が信頼できないことを示すときにも、われわれは自分の能力を用いてそれを行わなければならないということを示しているからである。しかし、この(7)の原理はそれだけに尽きるものではない。というのも、ここでもリードの説明は、論理的な側面だけではなく、

実践的な側面にもかなりの光を当てているからである。例えば、次のようにリードは言う。

われわれは、自分の推論能力と判断能力を必ず信じるように生まれている。そして、それらが誤りがちなものだという強い信念は、最も偉大な懷疑主義者によつても、それほど長い時間は維持されない⁽²⁾。

ここで述べられていることは、われわれが自分の能力を生まれつき信じるようになっていくということである。これは、先ほど述べたような論理的な観点からの議論ではなく、われわれは事実として、あるいは心理学的に自分の能力が信頼できるものであると信じているということ、そして実際の生活の場では、ほとんどの場合そのような信念を持っているということである。リードは次のように言う。

一般的命題のときよりも、個別の事例で、より強力に同意を強いるというのが、このそして多くの第一原理のうち一つの特性である。多くの懷疑主義者が、おそらくわれわれの現前する思考の存在を除いて、科学のあらゆる一般原理を否定してきた。しかし、これらの人々も、個別の事例では、推理し、論駁し、証明し、同意し、反対するのである。彼らは、すべての推論をひっくり返すために推論を用い、判断するべきではないことを判断し、盲目であることを明晰に見るのである。多くの人々は、

感官が誤りやすいものだとして一般に主張する。しかし、彼らの安全に必要なときに、個々の事例で彼の感官を信用しないほど懐疑的な人は見出されたことがない⁽¹³⁾。

このような(5)や(7)についてのリードの議論は、彼の可謬主義的な立場の一つの特徴を浮き上がらせる。それは、われわれへの能力への信頼性である。われわれの知識は「常に確実なもの」というわけではない。しかし、それでもわれわれは自らの本性を信頼するべきだというものである。そしてリードは、知識の概念を柔軟なものにすることによって懐疑主義を否定するのである。

三、ポパーの可謬主義

すでに述べたように、リードの認識論は、プラグマティズム、特にパースの認識論との類似的関係においてしばしば取り上げられる。しかし、本論文では、別の哲学者をとりあげてリードと比較してみたい。その哲学者とはカール・ポパーである。ポパーは、プラグマティストというわけではなく、特にデューイの道具主義的な科学の捉え方に対して厳しく批判している。しかし、彼はパースのことはかなり高く評価していたようで、しばしばパースに言及しているが、その内容はかなり好意的なものである。パースとポパーに共通するのは可謬主義的な立場であり、それはまたリードにも共通する立場である。実際に、私はリードとポパーの類似点を述べるつもりである。しかし同時に、両者には大きな違いもある。

そしてこの違いが、可謬主義の二つの方向性として捉えることができると考えている。

まずポパーが常識についてどのように述べているかを見てみよう。ポパーもまた、リードやパースとともに、絶対確実な基礎が探求の出発点となることを否定している。

科学・哲学・合理的思考は、すべて常識から出発しなければならぬ。(中略)常識といったあいまいで不安定なものが、どうしてわれわれに出発点を与えることができるのだろうか。私の答えはこうである。われわれは(たとえばデカルトとか、スピノザ、ロック、バークリ、カントのように)こういった「基礎」の上に確実に堅固なる体系を築こうとしたり試みたりするのではないからである⁽¹⁴⁾。

リードと共通する点は、常識が探求の出発点となるという意味である。そしてこのことは、絶対確実な基礎を打ち立てるためにあらゆるものを疑うという試みが誤った試みであることも示している。しかし、今引用したポパーの言葉を見ると、すぐにポパーとリードの違いも現れているのに気づかされる。ここでポパーは常識が「あいまいで不安定なもの」であると述べている。一方、リードによれば常識は自明なものだと判断されたものである。この違いは、両者が述べている常識というものの違いに訴えることで説明できるかもしれない。例えばポパーは、「われわれが出発点とする多くの常

「識的な仮定」の例として「地球が平面であるという説」をあげており、そういったものがしばしば批判され、否定されることを述べている。「地球が平面である」という信念は、たしかに前科学的な信念としては常識的なものかもしれないが、例えば「外的な物体が実在する」というような信念ほど根本的なものには見えない。もつとも、何が根本的で、あるいはそうでないかを確定することは難しい点は認められなければならないだろう。

しかし、ポパーはこのような「身近な」常識だけをとりあげているわけではない。彼は「われわれが出発点とする多くの常識的仮定——常識的背景知識と呼びうるもの——は、どんなものでもすべて、常に論駁を加えることができ、批判することができ」と述べている。つまり、どのような常識も批判の対象となると述べられているのである。事実、ポパー自身は実在論者であるが、実在論は論駁不可能ではあるが、最も有望な仮説であると考えている。それと同時に、彼は観念論もまたそうであると述べている¹⁵。つまり、両者は、批判を通してどちらが採用されるべき仮説かが争われるものなのであるとも考えることができる。そしてポパーは、常識について述べるときに、リードにも言及している。ポパーは、常識と実在論に固執する点で、リードと意見を共有しているというのである。

常識がわれわれの探求の出発点であること、そしてその常識的な信念には実在論的な立場が含まれること、確かにこれらの点は、ポパーとリードが共通するものである。さらには、

知識の考え方にも重要な共通点がある。それが可謬主義的な知識観である。しかし、この可謬主義的な知識観、そして探求の出発点としての常識の位置付けは、両者の間の類似性にも関わらず、一方で、その性格には大きな違いがあるように思われる。以下ではその点について述べていくことにしよう。

ポパーは、まさに可謬主義の代表的な哲学者の一人だと言える。ポパーの可謬主義は、われわれの知識が確実性を含まない、つまりわれわれには誤る可能性があるとすることを、たんにその理論の中に含んでいるだけではなく、むしろそれを強く強調したものである。ポパーの哲学者としての主たるフィールドはもちろん科学哲学であるが、ポパーは社会制度、政治体制などについても非常に多くの言葉を残しているが、そういった分野における彼の考えも、一貫して可謬主義的な考えが軸になっているところが興味深い。例えば、ポパーは、誰が政治を行うべきかという問い——プラトンなら哲学者と答えるような問い——は、不適切な問いであるという。例え、どれほど優れた哲学者が統治者となろうと、プロレタリアートが統治者となろうと、同じ問題が、この問いに対する解答には含まれている。それは、どのような者も誤らないということはないにもかかわらず、このような問いの視点には、その点が欠けているということなのだ。だからこそポパーは、むしろわれわれは、統治者が誤りを侵したときに血を流すことなく統治者を変えることができる制度は何かと問うべきだと語るのである。

ポパーのこのような可謬主義が、リードのものとその性格

を異にすることは明らかだろう。ポパーは、われわれの能力の信頼性よりも、むしろそれが同時に持つ「誤りやすさ」を強調するのである。

例えば、リードにおいては必ずしも明確であるとは言えない知識と真理の関係が、ポパーにおいては明確に述べられている。通常、知識とは確実なものではなければならないと考える立場にとつては、知識と真理は、ほぼ同じものの裏返しであると言える。真理を得ること、これが知識を持つことである。しかしポパーは、クセノファネスを引き合いに出し、知識と真理が異なるものであることを明確にする。われわれは、真理を探究する。しかし、われわれは真理に到達することはできないし、真理に到達していたとしても、それを知ることではできない。この場合、知識とは、われわれはとりあえず採用することが最も合理的である仮説でしかない。そして、これこそが、ポパーの有名な反証主義を生み出す根拠である。われわれは、知識が真理であると検証することはできない。ただある仮説が、間違っていることを反証することができただけである。たとえある科学理論が反証に耐えたとしても、それは当座のものでしかないかもしれない。

ポパーは、必ずしも多くの箇所でもリードに言及しているわけではない。しかし、リードについて、彼が共有していると考えている立場があることを述べている。それは、常識への尊敬と実在論である。しかし、リードにおいては、第一原理に組み込まれている実在論も、ポパーにとつては一種の——ただし強力な——仮説である。(ポパーは観念論は実質上反

証できない仮説だと考えている。)ポパーにとつては実在論はもともと採用すべき仮説であるが、無条件で採用されるべきものではない。また、常識についても、先ほど述べたように、ポパーはすべての知識が常識から生まれることを認めているが、同時に、極めて常識が誤りやすいものであることを強調する。この点でも、ポパーの立場は、リードと隔たりがある。さきほどの引用箇所では、リードの名前は取り上げられていなかったが、ポパーは、明確に「これらの「基礎」の上に確実で堅固なる体系を築こうともくろんだり試みたりするのではない」と述べていた。これはある種の第一原理のような存在を否定しているものとして受け取れることもできる。

四. 二つの可謬主義

リードとポパーのように同じく可謬主義的な知識観をとりながらも、このように性質の異なる二つの立場を比較して、われわれは何を考へるべきだろうか。その詳細な検討は紙面の関係上のちに譲りたいが、簡単にこの考察が示していることについて述べておくことにしよう。

まず、可謬主義は、知識に確実性を求める立場に対して、柔軟な知識概念を採用している。このとき、彼らの立場が伝統的な懐疑主義に対して十分な対応となっているのかということは考慮されるべきである。リードもポパーも懐疑主義に対しては批判的な態度をとっている。しかし、そもそも採用されている知識概念の違いが、この対立を不鮮明なものにしている。われわれが知識を得られるのかどうかという対立は、

どのような知識概念をわれわれが採用するべきなのかという対立へと移行するのである。

第二に、同じ可謬主義をとっていたとしても、この論文で見たように、リードとポバーはそのニュアンスが大きく異なる。信頼性を強調するのか、文字通りわれわれの可謬性を強調するのか、その立場の違いは、われわれの実践的な問題にまで影響を及ぼすと考えられる。もちろん、この違いは、〇か一かというような、極端なものとして捉えることはできない。まったく自分たちの能力を信頼しないならば、われわれは懐疑主義に陥らざるを得ないだろうし、完全に信頼するならば、独断論に陥るだろう。この二つの側面をどのように調整して考えるべきなのかは、さらに検討を要する。リードとポバー、それぞれ個々の哲学者についていうならば、もちろん彼らが生きた文脈から、両者の違いを説明することはできる。感覚的な信念が、デカルトなどによって過小評価され、それが懐疑主義へと陥るのではないかという問題がリードの前にはあった。それに対峙するためには、われわれの本性的能力の信頼性を要求する必要があったのだろう。かたやポバーの場合、実証主義が大きな影響力を振るっていた。これは真理を検証できるという考えであり、しかしポバーは、ニュートン物理学がアインシュタインの物理学に取って代わられることを目の当たりにし、確実だと思われたものが変化するさまに衝撃を受けた。そしてそういった理論的な問題だけではなく、世界大戦、独裁政治が生み出す残酷な行為、こういったものによって人々がどれほど容易に誤るのかという

ことを目の当たりにしたこともあるだろう。しかし、この問題は、そういった個人的な問題を越えて認識論的な問題として考察するに値すると私は考えている。

今述べたようなことは、この本論文ではこれ以上述べることはできないが、最後に、ポバーと比較したときのリードの問題点として私が考えているものを指摘しておくことにしよう。それは、第一原理という概念についてである。あらゆる知識というものが可謬的であるとすれば、本当に第一原理というものが必要なのだろうか。第一原理を否定することは、何も探求の出発点がないということをももちろん意味するわけではない。既に述べたように、ポバーもわれわれの探求が常識から始まると述べている。しかし、それは当座のものであり、第一原理という何か特別なものではない。また、第一原理自体についても、もしもリードが改定される可能性を認めているならば、そのとき、それは別の考えを用いてなされることになる。第一原理を改定するときに利用される考えは、第一原理なのか。ある第一原理の改定に用いられる考えは、リードがあげる他の第一原理に限定されるのか、それとも、それ以外の考えも用いられるのか。そのときそのほかの考えというのは、新たな第一原理となるのか。

こういった点を考えるならば、われわれの信念には比較的に改定されにくいものもそうでないものもあるというだけであり、何かを第一原理と呼ぶ必要はない。しかももしも第一原理が改定可能なものならば、「他の真理はそこから演繹されるが、どのようなものからも演繹されない」ようなものが

なければならぬと考える必要性は薄れる。むしろ、すべての知識は演繹的ではない、あるいは論証可能なものというわけではないと言えよ。当時の哲学者においてはしばしば見られることであるが、リードは数学的なモデルにすべての知識を当てはめようとしすぎたのではないだろうか。数学の場合は、われわれは公理を定めることができる。しかし、われわれが生きていく世界については、われわれはそのような権力をもっているわけではない。

ただし、やはり知識から確実性を分離し、柔軟なものであることを明らかにしていること(ただし、これはロックやバークリ、ヒュームにも見いだすことができる)と私は考えているが、これはリードの大きな功績であり、そして現代に最も影響を与えた点であることは疑う余地はない。

【註】

- (1) Cf. Nate Jackson, 2014, "Common Sense and Pragmatism: Reid and Peirce on the Justification of First Principles," *The Journal of Scottish Philosophy* 12, pp. 163-179.
- (2) Thomas Reid, 2002, *Essays on the Intellectual Powers of Man*, Derek R. Brookes (ed.), Pennsylvania State University Press, p. 426.
- (3) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 557.
- (4) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 564. 引用文中で、一般人が蓋然性を確実性と反対するものとして捉えているというのは、質的に対立するのではなく、高低のような、同じ質の上での対立である。

(5) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 456.

(6) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 41. また「だが、第一原理について、哲学者の中でかなり大きな意見の相違があるようである」と述べるように、哲学者の間でも第一原理として異なるものが考えられていることを認めている。

(7) G. E. Moore, "A Defence of Common Sense," G. E. Moore: *Selected Writings*, Thomas Baldwin (ed.), Routledge, 1993.

(8) 「私が今導入した四つのすべての表現、つまり「物質的事物は実在していない」…は、(一)で私が用いた表現と違い、実際のところ曖昧である。」(Ibid., 113)。

(9) リードとアメリカのプラグマティズムの関係が、近年では論じられるようになってきた。そのとき、リードの第一原理が、実践的なものであり、それがパースの信念についての理論と共通したものであることなどが研究者によって指摘されている。

(10) 方法的懐疑のうち、感覚がしばしばわれわれを欺くという議論は、欺かない場合があることが前提となっているところからいえることができる。だから「や」「欺く」ことがある」と言えるのである。

(11) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 480.

(12) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 481.

(13) Reid, *Intellectual Powers on Man*, p. 482.

(14) Karl R. Popper, 1972, *Objective Knowledge*, Oxford Press, p. 33.

(15) Ibid., pp. 38-39.